広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「縁意識」から考える文学教材「鏡」の可能性 ： 慢性痛を抱えた「傷ついた語り手」を通して
Author(s)	雷, 民瀲
Citation	国語教育思想研究 , 31 : 11 - 21
Issue Date	2023-10-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054588
Right	
Relation	

「縁意識」から考える文学教材「鏡」の可能性
―慢性痛を抱えた「傷ついた語り手」を通して―

キーワード：「縁意識」　「慢性痛」　「語り手」

広島大学大学院・院生　雷　民瀲

0．はじめに

「傷ついている語り手」は、内部から崩れた、崩された自己という複数性の中にとどまり、そこから、崩れた、崩された自己を語ろうとしている。物事を見る、捉える時には、物事の外部に立って、捉えようとする。しかし、物事自体の様相は永遠に捉えられないため、了解不能であり、そうなると、メタ的に捉えるしかない。しかし、メタ的に捉えようとすれば、自己の内部にある、崩れた、崩された自己のことは語り得ない。自己自身が抑圧されていること、あるいは、内部から崩す、崩された自己を、外部からは認識し得ない。

主体の自己内自己の存在、主体が抑圧されていることの認識がなければ、永遠に外部に立つしかない。一方で、自己の内部にとどまらなければ、崩れた、崩された自己のことは語り得ないが、内部にとどまる限りそれらの自己のことは認識し得ない。語ろうとすれば外部に出ざるを得ず、外部に出れば語れないので内部に戻る。その結果、「傷ついている語り手」は、永遠に語り続け、永遠に語りを止めることはできない。

本論では、「傷ついている語り手」と言う概念を入り口にし、「慢性痛の痛み」という概念や「縁（フチ）」という概念を援用しながら、自己の中の複数の自己とどのように向き合わせるか、その向き合うこと自体が文学教育にとってどのような重大な意味を持っているかについて論じる。

1．「複数の自己」「代表化された（ない）自己」

自己の内部には、複数の自己が存在し、そのうちの一つは、頻繁に表象化される自己（「代表化された自己」）となる（難波（1999）、難波（2008））。異なる言語の間に立つと、自己の内部の他の主体が「代表化された自己」に抑圧されていることが認識できる。しかしながら、必ずしも多言語をさえ身に付ければ、複数の自己の存在を認識するわけではない。言語を道具として使うのではなく、切実に自己の中の複数の自己と向き合わないと起こらない。この問題は、複数言語話者にとどまらない一方で、複数言語話者には際立つ問題となる。

複数の自己のそれぞれは、「代表化された自己」と同様にそれぞれ世界観を持っている。通常は「代表化された自己」とその世界観によって日常世界を人は生きているが、何か非日常的な出来事に遭うことによって、「代表化された自己」は日常世界とともに影を潜める。そのとき、日常的に抑圧された「代表化されない自己」が日常世界に現れる。

人間の中には「代表化された自己」と「代表化されない自己」という複数の自己が存在するが、「私」自身は結局どれでもなく、それらの自己と自己のはざまに立つと言える。そのはざまとは一体どういうものなのか。これが、本論で言う人間の「縁」というものである。

また、言語に関わって次のようなことを本論では論じる。母語と第二言語を学んでいる学習者にとっては、少なくとも二つの言語世界観を持っている。多種言語世界観は、単一の言語世界観（母語）と違って、多言語の大きな意味は話者自己内自己、いわゆる、複数の自己の存在を捉えることが可能になる。単一言語の話者は言語を話す時に、自己が間に立つという意識がない、一方、多言語話者は、言語と言語の間に立つ（言語の縁に立っている）と認識しうる。

筆者は、第二言語として日本語を勉強したが、日本語を使う時に、中国語意識と日本語意識が同時にあり、二つ言語の間に自分が存在する。ここで留意すべきことは、多言語を身に着ければ、複数の自己を認識することができるようになるわけではないということである。なぜなら、中国語を使う時に、筆者は単一（中国語）の世界観を持つが、もし日本語をただの言語道具として使うときは、また単一の世界観のままであるからである。すなわち、言語を道具として使うのではなく、多言語と切実に出会うような場を作ることによってのみ、自己の中の複数の自己が向き合い、「縁に立つ」感覚が生まれる。特に筆者の場合、母語である中国語では表現し得ないことが、日本語では表現できた。

つまり、筆者にとっては、日本語使用が通常である場での日本語使用こそ切実な希望であった。

複数の自己とは何かについて、難波（1999）では、日本語学習者を例として、自己内自己が分裂していると指摘した。難波（1999）は国語教育、特に文学教育において、「ただ一つの正解」、「ただ一つの日本語」という問題を強く批判した。難波は、自己内自己は抑圧されている存在とした。筆者（日本語学習者）の考えから見ると、日本語を使う時の筆者は抑圧されている側である。しかし、筆者本人はそのことが気づかずに、話している。つまり、日本語を使う時の筆者は抑圧されている側であるということ自体に違和感を感じていないことである。日本語を使う時の世界観も筆者の自己内自己の一つとして確実に存在していることさえも気づかなかった。

第二言語を使う時の自己は、自己の中の他者の存在である。一方で、第二言語を使う時の自己も独自の世界観を持っている。第二言語を使う時のもう一人の自己は、つねに抑圧されている側である。すなわち、日本語を使う時の筆者がつねに母語を使う時の筆者を抑圧している。それに気づいた瞬間に、「縁に立つ」という感覚が出てくる。なぜなら、自己が抑圧されていることが気づいた時点で、すでに、「代表化された自己」が対象化してしまい、一方で「代表化されない自己」のことも意識するからである。筆者が日本語を切実に使う時、筆者は抑圧されている側の世界に生きている。しかし、筆者自身はそのことに気づかずに、意識もしていない。そして、意識した瞬間、筆者は「抑圧されたまま言語の縁に立っている」ことを自覚するのである。

1．1．縁意識の導入

難波（1999）、難波（2008）は人間の中の分裂する複数の自己の存在を明らかにしたが、その複数の自己がどのように互いを向き合わせることは論じていない。そして、問題は、複数言語話者にとどまらない。

ここで、「縁」と言う概念について検討する。この「縁」と言う概念は、魯迅研究者の鄭（2000）の論文に表れている。

鄭（2000）は「縁」という概念について次のように述べている。（日本語訳筆者　以下同じ）

鄭（2000）『站在地平线尽头的人、 总会感觉到在极目远眺处、 天空与大地是粘合在一起的;站在悬崖边的人、 也会觉得天空与深渊是处于同一个垂直面上。这种独特的视觉误差、 正是由于置身于空间边沿上所带来的一个特殊的视觉图景。在这里、 上与下、远与近的距离都缩短了、 融合了。在这样的一个视觉图景中、主体的想象力对外界就有了一种强大的“翻转”能力和超越能力、 也就是说、 世界在他的眼中、 不仅变成了直观的对象了、 变成了一个“它者”。』（p. 37）

「地平線のつきたところに立つ人は、遠くまで見えそうな感じがする、天空と大地は粘っている。崖の縁に立つ人も、天空と深淵は同じ垂直面に存在すると感じている。このような特別な視覚の誤差は、まさしく体が空間の縁にいるからこそ、この特殊な視覚図景をもたらせる。ここで、上と下、遠と近との間の距離が縮まっていて、融合している。このような視覚図形の中で、主体の想像力は外界に対して、強大な「反転」能力と超越能力を持つことができる。ということは、世界は、その人の目の中で、直感的な対象ではなく、「他者」になる。」

鄭の縁意識を考えて見ると、縁は物事の間、抽象と抽象の間、現実と現実の間、現実と虚妄の間だと説明できる。筆者の考えでは、縁意識は、抽象的な世界観であると考えられ、縁意識は単なる意識ではなく、世界観と考える。縁意識の世界観によれば、内部から崩された自己という「代表化されない自己」と「代表化された自己」同時に現れることが説明できると考える。

筆者は、雷（2019）で次のように述べた。

「私の最初の縁の意識は、我々にとって母語と第二言語を学んでいる学習者にとっては、中国語意識と日本語意識が同時に持っているから、通訳をする時に、二つ言語の間で、縁の意識が存在する。現実の世界と虚偽の世界の間で縁が存在するのである。それに、現実の作家がこの現実と虚偽の縁にいると筆者が考える。縁の中で主体が捉えられない客体そのものという前提に「真実」の中に隠された「虚偽」が認識できる。そこで、永遠に了解不可能な他者が存在する。」（p. 26）と述べている。

雷（2019）によると、「縁」というものは人間の意識に同時存在することを説明した。また雷（2020）では、自分自身の瀕死経験を振り返り、縁意識の存在を分析

した。「縁人間である人間にとっては、人間の思惟はただ、現実の世界のみならず、無意識の世界も同時に考える。したがって、縁意識の人間は周りから理解されない状態は逆に普遍である。その結果、縁意識の考えでは、身体は現実の世界に生きると言う現実に無力感が強くて目に見える世界は逆に生きる世界ではなくなり、無意識の世界こそが生きる道である。」（p. 74）と述べている。

筆者には、縁意識はどのように形成されているか。筆者は、持病であるパニック障害に遭い、正常の世界に生きる身体は薬に抑圧されている。しかしながら、薬を飲まないと、正常の世界に戻れなくなる。つまり、薬を飲む筆者と薬を飲まない筆者という二つの主体がある。その二つの間に立つ筆者は、いわゆる、縁に立っている。つまり、縁意識を持っている縁人間は何か（筆者の場合は、薬）によって生きることができる。一方で、その同じ何かに（筆者の場合は、薬）よって抑圧されて生きているのである。筆者自身を持病という側面から見た場合、言語とは異なり、逆に「代表化されている自己」は抑圧されている側なのである。このように考えると、縁意識が生まれてくるためには、「代表化されている自己」が抑圧する側でありまた抑圧される側でもあるという複雑な条件が必要なのかもしれない。

河上（2021）は、「「解離」を述することは、学習者の支配的自己と抑圧的自己を構造的に示すことであり、（中略）文学が学習者の生々しい一面と響き合っている可能性を示すことになるためである。」（p. 3）と述べている。

河上の「解離」論においては、「解離」患者の「眼差しとしての私」と「存在者としての私」が両方同時に存在し、しかも、「存在者としての私」は「眼差しとしての私」に影響されていることが認識できず、分裂している。河上は、「柴山（2007）は「眼差しとしての私」の二つの振る舞いを指摘している。一つは身体の外部で漂う「体外型隔離」（p. 93）、もう一つは外部からもう一度「存在者としての私」の内部に潜り込みつつも「眼差しとしての私」の性質を損なわい「体内型隔離」（p. 93）で、どちらの場合も自分が私であるという感覚は不安定である」（p. 5）と指摘した。

河上論から考えると、「解離障害」を抱えている患者は、自分の主体を自ら捨てることが捉えられる。「眼差しとしての私」と「存在者としての私」は同時に一人の語り手—私自身である。しかし、「眼差しとしての私」と「存在者としての私」の相互関係は河上論ではまだ見えていない。言い換えると、「解離障害」を抱えている患者は自分が解離する原因がわからないのである。

この河上の「解離」概念論において、本論が注目したいのは、「眼差しとしての私」と「存在者としての私」は同時に一人の語り手—私自身であることをどのように認識させる問題である。言い換えると、なぜ、一つ身体の中に二つの主体が同時に解離するかということを踏まえ、「解離障害」を抱えている患者の課題を、「眼差しとしての私」と「存在者としての私」の間に浮遊する「痛み」という概念で分析したい。

2．—精神の語り—「縁意識」と慢性痛の患者

この「縁」という概念は、魯迅研究者の鄭（2000）の論文に表れている。鄭（2000）によると、「縁」は物事の間、抽象と抽象の間、現実と現実の間、現実と虚妄の間だとしている。鄭は、この「縁」概念を使い、魯迅の作品世界に「縁」があると論じた。論者は、「縁」を「縁意識」として作者や登場人物の世界観の問題と捉え直した。この考えに基づき、雷（2019）は、「縁意識」というものは，例えば、複数言語話者が持つ複数言語の間に立つような意識や瀕死体験を経験した人が持つ生と死の間に立つような意識のような、一つの自己の中に、二つの主体意識が同時に存在するようなものを「縁意識」とした。

また、雷（2022）では、「縁意識」の世界観を持つ人の場合、一方の意識がもう一方の意識を抑圧しているのが通常であることを示した。例えば、複数言語話者の場合ある言語社会で生きているときは別の言語については抑圧していることや、瀕死体験を持つ人が生きている間は瀕死の体験を抑圧するということである。さらに、後で詳しく述べるが、慢性病を抱える人が薬でかろうじて生きているような場合、薬で生きていることがむしろ非日常的な有り様である場合、「薬で生きている自己」と「薬なしでは死ぬ本来の自己」の「縁意識」を持つと考えられるが、前者は後者によって抑圧されているという、複雑な状況になることがある。

また、雷（2022）では、河野（2014）で提示された

〈痛みの慢性痛〉という考え方を使い、痛みを持つ慢性痛が「縁意識」を持つ身体にどのように現れたのかについて、以下のようにまとめた。

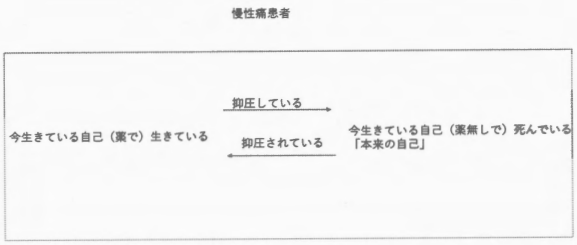
慢性痛と「縁意識」が関係するのは、慢性痛に遭った人間は正常な人間のように正常な世界に生きると同時に、非正常、痛みの世界に生きているからである。慢性痛の人間は「縁」の世界に生きており、そのことを意識化して「縁意識」を持つのである。

慢性痛の患者にとってその傷ついた身体は、生と死の「縁」にある。内部から崩された自己の存在―かつて健康の自己―は、通常は常には意識されていない。しかし、痛みを持って、初めて意識されたようになる。ここにおいて、「縁意識」が浮上する。

先述した「慢性痛を抱える人が薬でかろうじて生きているような場合、薬で生きていることがむしろ非日常的な有り様である場合、複雑な状況になることがある。」について、説明する。慢性痛を抱える人が薬でかろうじて生きているような場合、あるいは、薬で生きていることがむしろ非日常的な有り様である場合、「薬で生きている（仮の）自己」と「薬なしでは死ぬ（本来の）自己」が存在し、「私」は両者の間にいる「縁意識」を持つと考えられる。それに加えて、「薬で生きている（仮の）自己」は、それが「仮の」自己であるがゆえに、「薬なしでは死ぬ（本来の）自己」から抑圧されているのである。薬でかろうじて生きている自己は、本来の自己ではないという声に常に怯えているといってもよい。だからといって薬を手放して本来の自己に戻ってしまおうとすると死んでしまう。慢性痛を抱えている人は、「縁意識」に立ちつつ、常に内部の「本来の自己」の抑圧に怯えている存在なのである。

したがって、慢性痛と縁意識が関係するのは、慢性痛に遭った人間は正常人間のように正常の世界に生きる同時に、非正常、つまり、痛みの世界に生きているからである。慢性痛の人間は縁の世界に生きており、そのことを意識化している、すなわち、縁意識を持つのである。

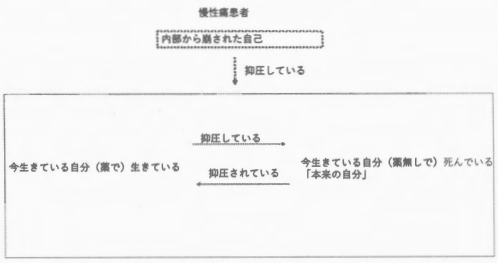
慢性痛患者の身体構造を以下の図に示す。



このように慢性痛患者は、この二つの世界観が同時に生きている。慢性痛患者には、この二つの世界観が同時に、（薬で）生きている現実的な自己と（薬無しで）死んでいる「本来の自己」が現れる。また、薬無しで死んでしまう「本来の自己」が抑圧される同時に、薬で生きている自己をこの「本来の自己」を抑圧している。これが、慢性痛という痛みの身体の特徴１である。

一方で、慢性痛の患者はこの二つの自己を持っていると同時に、薬無しで死んでしまう「本来の自己」が抑圧される同時に、薬で生きている自己（言わば、現実に痛みを持つ身体）が意識的に、身体の中で行われる慢性痛の身体構造を抑圧している。だからこそ薬を飲んでいる身体が対象化されてしまう。

なぜ、薬を飲んでいる身体が対象化されてしまうのか？それは慢性痛の患者にとっては、過去の自己（慢性痛が抱えていない自己）がまだ残っているからである。しかし、痛み、病気によってむりやりに出された自己によって、過去の自己（慢性痛が抱えていない自己）が消されてしまう。すなわち、内部から崩された自己はかつて健康の自己なのだが、常には意識がされていない。しかし、痛みを持って、初めて意識されるようになるのだが、しかしすでに死んでいる自己なのである。**これが、慢性痛の身体の特徴２である。これを図で表す。**



このように、慢性痛の患者は痛みに遭ったことによ

って痛みを持つ「代表化された自己」が現れる一方、内部から崩された自己という「代表化されない自己」を同時に日常世界に現れることができるようになる。

すなわち、正常の世界に薬に頼って生きている主体としての身体、身体が捉えた客体の世界という主客相関が対象化してしまう。

慢性痛の痛みで内部から崩された自己（かつて痛みがない自己）と今痛みを抱えている自己が同時に日常世界に現れる。それだけでなく、抑圧―被抑圧　という構造が主体自身を抑圧している。すなわち、慢性痛の患者は「代表化されている自己」が抑圧する側でありまた抑圧される側でもあることが見られる。

このようにして今生きている身体が対象化され、メタ的に自己自身の身体を捉えることができるようになるのである。しかし、そのメタ的に捉えている自己は、痛みを抱えたままの自己である。痛みを引きずりながらメタ的に捉えることは、縁に立ちながら、内部と外部を永遠にループする存在となることでもある。以上の慢性痛の患者を抱えている身体構造をふまえて、文学作品の中における「傷ついている語り手」を考えたい。

３．「傷ついた語り手」の世界から学習者の「縁意識」へ

「縁意識―慢性痛」と言う概念を援用することで語り手が語りたいのか、なぜ、語りが生まれるのかの真相が見えてくる。それは、「痛み―縁意識」の語り手は抑圧―抑圧され　という身体の構造を意識し、痛みの自己、今生きている主体自己は慢性痛の身体、痛みが持っている同時に、（かつて健康の自己身体）本来の自己の意識もある。しかし、痛みを持ってから、本来の自己の健康的な身体はもうなくなって、記憶だけ残っている。したがって、一人の身体にこのような　抑圧―抑圧され　の意識構造が生まれてくる。

いわゆる、普段の現実世界では、一つの自己が一つの身体に現れる。しかし、「縁人間」にとっては、何かあって、もう一つの自己が出てくる。そこに、自己が何かに抑圧されていることもわからないまま抑圧されていることを感じたとすると、そこに、言語（語り）が生まれる。その言語（語り）を通じて、抑圧されている自己内自己のことを意識していく。

こうして、自己の中の自己の存在を認め、同時に存在していることができるようになる。すなわち、「縁人間」は何かをして生きてきたわけ、何かをして生きてきたけれども、その何かをして生きてきた自己はもう本来の自己ではないと言う矛盾性を今傷ついた身体に向けて語り続けるのである。

したがって、この「縁人間」は、今生きている身体が対象化され、メタ的に自己自身の身体を捉えることができるようになり、一方で、そのメタ的に捉えている自己は、痛みを抱えたままの自己である。このように、痛みを引きずりながらメタ的に捉えることは、縁に立ちながら、内部と外部を永遠にループする存在となるのである。

このことをふまえて、文学作品の中における「傷ついている語り手」を考えたい。

森（2013）は、読者である学習者を「目撃証人」と述べ、

「目撃証人としての読者は、単に苦痛を回避するために物語るのではない。目撃証人としての読者は、自身の固有の苦痛においてそれを語ることになる。ここに、目撃証人としての読者が、自身の苦痛を語るとき、その語りは虚構でありながら現実のものとなる契機を見出すことができる。そして、語りにおける虚偽・欺瞞は読者の証言としての語りの中に、あるいは証言者となる過程において、体験的に引き受けられていく」（p. 47）と述べる。

森は、読者は語り手と読むことで、語り手が語っていることを自分自身の物語として収納され、語り手を読むことは、むしろ、自分自身を読むと言うことである。しかしながら、森論では、語り手の精神状態に対する分析が足りないため、学習者は証言者となっても、どのように語り手の語りから引き受けられることが難点と考える。「目撃証人としての読者は、単に苦痛を回避するために物語るのではない。目撃証人としての読者は、自身の固有の苦痛においてそれを語ることになる。」ここには、学習者は、「傷ついた語り手」になって、語りの世界に没入する読者の姿が見られる。この時の学習者は単なる語り手に同化するだけでなく、学習者自己が何かに抑圧されていることもわからないまま抑圧されていることを感じたとすると、抑圧されている自己内自己のことを意識していく。同時に存在していることができるようになる。

「傷ついた語り手」が語る文学作品を教材として文学の授業を扱うことで、学習者は自分なりの語りを発

見し、「代表化されている自己」である「いつもの自分」が抑圧する側でありまた抑圧される側でもあることを認識するのである。このことこそが、森が言う「証言者となる過程において、体験的に引き受けられていく」学習者の姿である。

本論では、「傷ついた語り手」を扱うことで、学習者は自分の身体との調和や身体に耳を傾けるのを可能にすることで、自分自身の「縁意識」に気づき、他者の意見と違う「代表化されない自己」への認識も促させることこそ、森が提示する「目撃証人としての読者」の在り方であると考える。

4．「傷ついている語り手」の登場 ―『鏡』を通して―

ここまでの議論を踏まえて、村上春樹『鏡』の教材分析を試みる。

本論では、「傷ついた語り手」を扱うことで、学習者は自分の身体との調和や身体に耳を傾けるのを可能にすることで、自分自身の「縁意識」を気づき、他者の意見と違う「代表化されない自己」への認識も促させることこそ、森が提示する「目撃証人としての読者」の在り方であると考える。以上のことを踏まえ、村上春樹『鏡』の教材分析を試みる。『鏡』の登場人物は「僕」は六十年代の大学紛争に巻き込まれる恐怖体験をずっと心の中に抑圧し続け、家にも鏡を置かないままで生きてきた。作品の名は『鏡』だが、家には鏡をなく、鏡を恐れていることを書いた。鏡を恐れていることを、生身の語り手「僕」は語れない。しかし、「僕」はずっとこの傷を抱えながら生きてきた。ここに、「傷ついた語り手」の存在を発見することができる。

「傷ついた語り手」（＝生身の語り手）は、メタ化して語りながらも、完全に外部に絶たず内部と外部（＝（精神内部）と（現実世界））を永遠にループしながら、語り続ける存在となる。すなわち、「傷ついた語り手」を扱うことで、語り手が語ることやその語りを聞くことが、学習者が自分自身の「縁意識」に気付き、対象化できると考える。つまり、身体を通じた学習になると言えよう。

これまでの『鏡』の作品研究では、「僕以外の僕」という幽霊の正体が何かという謎①と、鏡が存在するかどうかという謎②の２つの謎が研究されてきた(注1)。国語教育においても、「僕以外の僕」という幽霊の正体が何かという謎①と、鏡が存在するかどうかという謎②の２つの謎が研究され、授業が行われてきた（注2）。ただし、国語教育の実践（注3）では、「僕以外の僕」は「語り手「僕」の中の「他者」」と結論づけられ、一方「鏡」の存在は、謎のままで終わらせて授業されることが多い。謎①は解けたように授業され、一方で、謎②は謎のまま放置されてきたのである。 このような問題意識を踏まえた実践として、村高（2019）は語り手の語りに着目する実践が行われた。明解になったのは、謎①としての「僕以外の僕」の正体は、認めたくない自分の姿として「僕」の中に存在する。また、謎②に関しては、鏡が存在するかどうかがまだ不明である。

したがって、ただ、語り手の語りに注目しても、説明が不足である。すなわち、謎①と謎②を明らかにするためには、語り手の語りのみならず、語り手自身の語る行為そのものに着目しようとしている問題意識が大事であると考える。なぜ語り手が語りたいのか、なぜ、語りが生まれるのかについては明らかにならないと、テクストに向き合う読者としての学習者は、どのように語り手と向き合うのか、どのように当事者性を背負うべきか、と言う課題は明解にならない。だからこそ、本論で提示する「傷ついた語り手」と言う概念を今の文学教育に応用する価値は極めて大きいと考える。村高（2019）の実践における「生徒の疑問に、「鏡とは何か」、ではなく

「どうして『僕』は鏡の出現について言及しないのか」に着目しているものがあった。語り手が語らないことから分かる「僕」も気づかないとする根拠の一つである。今回の授業ではこのことを生徒に明示できず、残念であった。」（p. 18）

という生徒の発言は注目に値する。この実践では、語り手の語りに着目した解釈の深まりに、学習者の読みの変容が見られたが、さらにこのような生徒の発言が生まれていた。この発言は「どうして『僕』は鏡の出現について言及しないのか」という指摘であり、生徒の発言は、まさに、『鏡』と言う作品の語り手「僕」の精神状態に気づいたのである。

『鏡』の登場人物は「僕」は六十年代の大学紛争に巻き込まれる恐怖体験をずっと心の中に抑圧し続け、家にも鏡を置かないままで生きてきた。作品の名は『鏡』だが、家には鏡をなく、鏡を恐れていることを書いた。鏡を恐れていることを、生身の語り手「僕」は語れない。しかし、「僕」はずっとこの傷を抱えながら生きて

きた。ここに、「傷ついた語り手」の存在を発見することができる。**「傷ついた語り手」（＝生身の語り手）は、メタ化して語りながらも、完全に外部に絶たず内部と外部（＝（精神内部）と（現実世界））を永遠にループしながら、語り続ける存在となる。**

生身の語り手である「僕」は「みんなの体験談」から聞いて、「幽霊」と「予知とかの虫知らせ」という二つのパタンーを分類している。

「つまりさ、幽霊を見ている人はしばしば幽霊は見るんだが、虫の知らせを感じることはまずないみたいだし、虫の知らせをよく体験する人は幽霊って見ないだね。」（注4）と語っている。

一方で「僕」は、「これから、もちろんどちらの分野にも適さないって人もいる。たとえば僕がそうだね。」とも語っている。「僕」は自己の怖い体験を「幽霊」と「予知とかの虫知らせ」という二つのパターンに分類しない。ホストである「僕」は「散文的な人生」と語りながら、「口に出すことさえ怖がった」ことを聞き手である聴衆に向かって語っているのである。

「僕」の怖い体験談は「散文的な人生」で起こってしまった自己自身の中の体験談である。「散文的な人生」で起こってしまった自己自身の体験談を十年以上に自己の中に抑圧して、誰にも話したことはない。語り手「僕」は自己自身の中に起こってしまった**体験（僕以外の僕）**によって、抑圧してきた。語り手「僕」が超能力もない、「散文的人生」の中で、「散文的な人生」で起こってしまった自己自身の体験談を十年以上に自己の中に抑圧して、誰にも話したことはない。なぜなのか、それは語り手の「僕」が「口に出しちゃうと同じようなことがまた起こるじゃないって気がして」ということになる。

つまり、今語っている「僕」の中に、恐怖体験がずっと存在し、今の語り手「僕」が恐怖体験に抑圧されることの意識が存在する。しかしながら、登場する語り手が「口に出しちゃうと同じようなことがまた起こるじゃないって気がして」と言いながら、聴衆に向かって、語ってしまうのかについて、相沢(2018)は、

「「僕」はその事態を受け止めず、十年以上この話を誰にも話さず、鏡も置かないから、「非散文的なもの」を心の中で強く抑圧し、忌避して生きてきたことがうかがえます」（p. 221）と捉えている。

しかし、筆者は、「散文的な人生」で起こってしまって、誰にも話したことはないこの体験談を語れるようになることは、**語り手「僕」自身を相対化することと考える。**ここで、筆者は『鏡』の語り手「僕」は縁意識を持っている語り手であると考える。すなわち、**縁意識の語り手「僕」は何かに抑圧されて生きていく。抑圧されているけれども、抑圧しないと、生きていられない**という世界観を認識した上で、二つの世界観認識を同時に持つことができ、同時に、違う場面を読み取ることができる存在なのである。

語り手「僕」は自己自身の中に起こってしまった恐怖**体験**によって、抑圧されてきた。生身の語り手の「僕」は、自己の怖い体験が「幽霊」と「予知とかの虫知らせ」という二つのパターンのどちらでもないとしているが、この二つのパターンでもないことを意識することは、既に、普通の世界観認識を超えたのである。普段人間が生きる世界に対する認識のレベルを超え、自己自身の深層の部分を対象化している。したがって

「これから、もちろんどちらの分野にも適さないって人もいる。たとえば僕がそうだね。」（注5）

と語り手「僕」が語るのである。このように『鏡』という小説の冒頭で登場する一人称の語り手「僕」は縁意識をもって「傷ついている語り手」として描かれている。一つの「僕」が同時に二つの世界観を持ちながら、この小説の冒頭から語っている。

そうすると、一見、冒頭の相対主義者で登場する語り手「僕」が若者である聴衆たちに向かって、恐怖体験を語る風に見えるが、実は、鏡を恐れていること、「僕以外の僕」への後ろめたさがあるということを自己に向かって語っている。しかし、なぜ、恐れているのかは語れない。ここに、「僕」の縁意識がある。この時の語り手「僕」は「僕以外の僕」に憎まれ、支配されようとした。この「僕以外の僕」の存在は「僕」の縁意識によって生み出されたもう一人の自己だと筆者は考える。

いわゆる普段の現実世界では、一つの自己が一つの身体に現れる。でも、何かあって、もう一つの自己が出てくる。そこに、自己が何かに抑圧されていることもわからないまま抑圧されていることを感じたとすると、そこに、言語（語り）が生まれる。その言語（語り）を通じて、抑圧されている自己内自己のことを意

識していく。こうして、自己の中の自己の存在を認め、同時に存在していることができるようになる。

このように考えることで、『鏡』という小説がなぜ、語りえない「僕以外の僕」を語れるのかという問題が見えてくる。

なぜかというと、それは普段の人間は、痛みを持っていないから、当然縁意識の意識が生まれない。そういう意識があって、逆に対象化することができない。しかし、**「傷ついている語り手」は普通に過去の自己が存在し、しかし、その過去の自己を語っているではなくて、痛み、病気によってむりやりに出された自己ということ、いわゆる、消された自己といってもよい。うみだれたよりはかつてあった自己が消えてしまう。痛み、傷のない自己は内部から崩される自己になるということは、まさに、痛み、傷があることによって生み出された。内部から崩れる自己は何事によって、させられる感じがする。**

しかし、生身の語り手「僕」はもちろん、「僕以外の僕」の存在が認識できない。しかし、この作品の醍醐味は、生身の語り手「僕」は「僕以外の僕」の存在が認識できないが、生身語り手の「僕」を対象化する語り手。（これが田中（2021）でいう「機能としての語り手」といわれる存在かもしれない）（注6）、いわば、（縁意識を持つ）「僕」から生み出された自己である「僕以外の僕」の存在を認識することができる。**語っている「僕」自身の主体をメタ化して、身体主体と距離を置いて語ると同時に、「僕」と「僕以外の僕」は、実に同じ語り手である「僕」から語っている。**したがって、「傷ついている語り手」は身体を対象化するのではなく、その中に存在する抑圧―被抑圧　という世界観を抑圧しながら、身体の外部に立って、対象化された身体を語ることである。いわゆる、一つの身体の中に　〈語り―語られ〉を超えて語るのである。

では、「僕以外の僕」も「僕」の中のもう一人の自己として存在する以上、なぜ、「僕」を支配、憎むのかについて、筆者は以下のように考える。痛みを持つ自己は本来の自己（かつて健康の自己身体）を抑圧し、本来の自己（（かつて健康の自己身体）は慢性痛の痛みの自己によって抑圧される。**つまり、抑圧―抑圧されという構造になっている。しかしながら、「痛み―縁意識」の語り手は抑圧―抑圧され　という身体の構造を意識し、痛みの自己、今生きている主体自己は慢性痛の身体、痛みが持っている同時に、（かつて健康の自己身体）本来の自己の意識もある。しかし、痛みを持ってから、本来の自己の健康的な身体はもうなくなって、記憶だけ残っている。したがって、一人の身体にこのような　抑圧―抑圧され　の意識構造が生まれてくる。それだけでなく、このような身体を対象化することができるのは、あるいは、語れるようになるのは、すでに痛みを持って現実に生きている自己の主体自身は身体の中で抑圧―抑圧されという構造を抑圧している。**

したがって、「僕以外の僕」は「僕」の「痛み―縁意識」によって生み出される自己の存在は本来の自己身体を抑圧し、（僕が抑圧されている側である）慢性痛の痛みで生み出された自己と本来の自己が同時に日常世界に現れるのである。

5．「縁意識―慢性痛」を加えた『鏡』の授業構想

ここでは、田中、須貝、難波（2018）を参照しつつ、ここまでの議論を踏まえて、『鏡』の授業単元構想を示す。

本単元では、次のことを目標とする。

（単元目標）

(1) 学びに向かう力〈態度目標〉について

『鏡』という作品が読者にどのような問題を提起しているのかについて探求する

(2)「読むこと」の「思考力・判断力・表現力等」について

〇視点人物「僕」の行動と心理の変容を把握し、恐怖についての出来事を捉える。

〇最後の一文が「こういう話の結末ってわかると思うんだけど、もちろん鏡なんてはじめからなかったよ」となっていることは、〈語り手〉にとってどのような問題となるのか、考える。

（単元構想）

単元の大まかな流れは次のとおりである。

第０次　「学びに向かう力」（態度目標）形成

第０次とは、教科書本文を読む準備段階である。学生運動の時代背景を紹介するより、先に生徒自身が今まで一番ショックなこと、何が一番怖いことを考えさせる。そのことによって、自分が何かかわったのか、すこしでもいいので、考えさせる。

それについて、「鏡の存在」の意味を生徒に考えさせる。この「僕」と「僕以外の僕」の相互関係を生徒に考

えさせる。

第一次　範読とナゾの提出

村上の時代背景を説明してから、例えば、文書の中で第一人称としての語り手は村上ではないことを説明する。次に、重要語句、漢字、難語句がついたプリントを、それらの語句を説明しながら、範読する。「鏡」を読んでいく中でときたいナゾを書かせて提出させる。

第二次　ナゾの解明

ここでは、次のナゾについて考える（これのナゾは生徒の中にあればそれを取り上げ、なければ教師から提示する）

ナゾ１　なぜ、「僕以外の僕」が「僕」を憎んでいるのか、支配しようとするのか？

〈現実〉―〈回想〉―〈現実〉という時間帯から見て、そもそも「僕」にとっては鏡そのものがないものなのか？

ナゾ２　「というわけで、僕は幽霊なんて見なかった。僕が見たのは-ただの僕自身さ。でも僕はあの夜味わった恐怖だけはいまだに忘れることができないでいるんだ。」ということをどのように理解するのか？

ナゾ１とナゾ２を解くことによって、一体、「鏡」というものはあるのかという問題を生徒に考えさせる。何故かというと、「鏡」と言われたら、生徒はこちらの自分と鏡の中に移される自分の像が同時に思い浮かべる。しかし、『鏡』という作品には、鏡そのものがいないというナゾを生徒に認識することが大事である。

さらに次のナゾ３について考える。

ナゾ３　なぜ、鏡の中にいる「僕以外の僕」が「僕」を憎む、支配しようとするのか？

第三次　「縁」から「傷ついている語り手」を読む

（以下の説明を教師から行う）

ここまでの授業では、視点人物の「僕」から見る対象人物としての「僕以外の僕」、いわゆる「主体」と「主体が捉えた客体」のことのみをみてきた。しかし、「主体」と「主体が捉えた客体」という二項による世界像ではなく、（縁意識を持つ）「僕」から生み出された自己である「僕以外の僕」の存在を認識することができる。語っている「僕」自身の主体をメタ化して、身体主体と距離を置いて語ると同時に、「僕」と「僕以外の僕」は、実に同じ語り手である「僕」から語っている。したがって、「傷ついている語り手」は身体を対象化するのではなく、その中に存在する抑圧―被抑圧　という世界観を抑圧しながら、身体の外部に立って、対象化された身体を語ることである。いわゆる、一つの身体の中に〈語り―語られ〉を超えて語るのである。そこで、僕の内面世界（無自覚）も捉えられる。

『鏡』という小説の冒頭で登場する一人称の語り手「僕」は縁意識をもって「傷ついている語り手」として描かれている。一つの「僕」が同時に二つの世界観を持ちながら、この小説の冒頭から語っている。そうすると、一見、冒頭の相対主義者で登場する語り手「僕」が若者である聴衆たちに向かって、恐怖体験を語る風に見えるが、実は、鏡を恐れていること、「僕以外の僕」への後ろめたさがあるということを自己に向かって語っている。しかし、なぜ、恐れているのかは語れない。ここに、「僕」の縁意識がある。

この説明を受けて、次の新たなナゾを考えさせながら、「傷ついている語り手」を縁の構図を用いて図化させる。

A プールの音が出るのはなぜ

B 僕の内面世界について

ナゾ４　なぜ鏡が出るのか？

ナゾ５　僕と「僕以外の僕」の相関関係

第四次　「慢性痛」から「傷ついている語り手」を読む

ここでは、「傷ついている語り手」である「僕」を「慢性痛」の概念を使って分析するために、叙述により詳しく注目させる。作品としての『鏡』の語り手の僕が本当の慢性痛患者ではない、あくまでも比喩である。この場合の僕は何をしているのか、薬のかわりに、何をしている。慢性痛の患者は薬がないと生きていけない、そのかわりに、「僕」は何をしないと生きていきない、何かをしないと死んでしまう。何かをしているのはすでに本来の「僕」ではなくなる。しかしながら、「僕」が何かをして生きてきたわけ、何かをして生きてきたけれども、その何かをして生きてきた「僕」がもう本来の僕ではない。この「僕」の矛盾性を了解した上で、慢性痛の概念で「傷ついている語り手」である「僕」と「鏡」という境界の問題を認識する。例えば次のような記述に注目させる。

「僕」は既に変な感じをした。「すごく不規則なんだ。うん、うん、いや、うん、いや、いや……っていった感じの音なんだよ。なんだか変なたとえだけど、その時は本当にそう感じたんだよ」（注7）

「僕」は「僕以外の僕」を遭遇する前に、既に、変な予知を感じたし、もし、その夜は無理に起き上がっていなかったら、「僕以外の僕」と出会わないし、恐怖の体験ももちろん起こりはしない。しかし、この小説の前半部分「もう一度人生をやりなおすとしても、たぶん同じことをやっているだろうね。そういうもんだよ」（注7）と語り手「僕」が語っている。つまり、縁意識を持つ「僕」から生み出された自己である「僕以外の僕」の存在を認識することができるのである。

最後に、『鏡』という小説の冒頭で登場する一人称の語り手「僕」は縁意識の世界観を持ちながら、「傷ついている語り手」としてのこの小説の冒頭から語っているということを考えた上で、改めて最初から読み直す。

6．おわりに

本論では、複数言語において言語の間の問題が、筆者みたいな単一言語の学習者にも起こっている。つまり、単一言語にしても、間もある、本論でいう縁意識がある。人間は、抑圧されている側の世界に生きているわけである。しかし、自己がそのことが気づかずに、意識もしていない。本論では、痛み、慢性痛の概念を使い、人間は縁に生きていることを明示した。

また、文学教育では、縁人間である語り手は抑圧されていることによって、生きていく、しかも、自己が抑圧されていること意識し、抑圧されているそのことを現実の自己で抑圧して生きていく主人公になる小説を読むことで生徒たちも揺さぶられるのではないかと考える。一方で、学習者は「傷ついている語り手」を認識し、語り手は自己に向けって語っていることを認識した上で、よいカウンセラーになり、よい聞き手になり、「傷ついている語り手」を聞いてあげるというような姿勢を持つ学習者も期待されている。

縁意識の世界観からみると、語り手とは一体何かという問題に直面する。「傷ついている語り手」と第三項理論がいういわゆる「機能としての語り手」とは異なる位相に立つ。「傷ついている語り手」が二つの世界観を同時に持っていると考えるからである。「傷ついている語り手」が慢性痛を持っているように、異なる場から見ることができる。

注

1）杉山（1999）、高比良（1999）、石橋（2004）、加藤（2007）、西田谷（2008）、田中（2011）、田口（2018）など

2）千国（1995）、石橋（2016）、難波（2018）、村高（2019）、岡田（2020）など

3）府川（1999）、佐野正俊（2000）、鎌田均（2005）、岡田（2020）、など

4）『村上春樹全作品 1979—1989⑤』（1991）講談社

5）同4

6）田中実（2021）「この作品の〈語り手〉の「私」は自身も無意識の闇を抱え、自分の目に見え、耳で聞き取る相手、対象人物である閏土や楊おばさんの内面も見えていません。横並びにしか登場することはできません。これたいして、作品全体の言葉を統括しているのがこの〈語り手〉の「私」を「私」と対象化して語る〈機能としての語り手〉です」（pp. 82-83）

7）同4

引用参考文献

相澤毅彦（2018）田中実・須貝千里・難波博孝（編）『21世紀に生きる読者を育てる　第三項理論が拓く文学研究/文学教育高等学校』明治図書, 212-223.

河野哲也(2014)　『境界の現象学　始原の海から流体の存在論へ』　筑摩選書

河上裕太（2021）「学習者の「解離」が示す文学教育の課題と可能性」『国語科教育』(89), 3-10.

田中実(2021)「魯迅『故郷』の秘鑰—「鉄の部屋」の鍵は内にあって扉は外から開く—」,『都留文科大学研究紀要』(93), 67-84.

難波博孝（2015）「合言葉はF」『日本文学』64(8), 16-31.

難波博孝（1999）「漸近線としての日本語・国語科—「分裂した自己を統合する企て」への拒否」『日 本文学』48(1), 64-73.

難波博孝(2008)『母語教育という思想—国語科解体/再構築に向けて—』　世界思想社

フランク、アーサー・W. 鈴本智之訳（2002）『傷ついた物語の語り手：身体・病い・論理』ゆみる出版

村上春樹（1991）『村上春樹全作品 1979—1989⑤短編

集Ⅱ』講談社, 71-79.
村高聡子(2020)「語り手に着目した学習指導効果-「鏡」（村上春樹）の場合-」『中等教育研究紀要』(66), 11-20.
森美智代(2013)「文学体験に関する理論的検討：ルソーによる「解釈から証言へ」の移行に着目して」 国語教育思想研究（7）, 42-50.
雷民激(2019)「縁・意識の世界観―日中の『故郷』の作品観を通して―」『国語教育思想研究』(19), 19-28.
雷民激(2020)「存在論の哲学論と認識論の文学理論から考える文学教育　第三項理論から「縁」世界観へ」『国語教育思想研究』(20), 65-76.
雷民激（2022）「縁意識の世界観から考える文学教育―慢性痛を抱えた「傷ついた語り手」を通して― 」国語教育思想研究(25), 15-23.

（外国語文献）

鄭家建（2000）「魯迅：辺沿の世界」『魯迅研究月刊』(11), 30-42.